

LAKṢAṆĀ の機能対象 LAKṢYĀRTHA (II)

—転義法による語の文脈的意味—

小 林 信 彦

IV laksanā 分類の検討

前章では、KP *kārikā* の順序を追って、*lakṣaṇā* の種類を列挙した（前号 p. 13 表）。しかしながら、KP のこの分類図式には、問題にすべき点がかなりあるので、ここで改めて検討を加える必要がある。

1 ŚUDDHĀ と SĀROPĀ=SĀDHYAVASĀNĀ

問題の第一は、分類の最上位カテゴリーとされている ŚUDDHĀ—SĀROPĀ—SĀDHYAVASĀNĀ について、*kārikā* および *vṛtti* から、その明確な対立根拠が得られないという事である。では ŚUD[DHĀ] LAK[ṢAṆĀ] による転義は、SĀR[OPĀ] LAK[ṢAṆĀ] や SĀDH[YAVASĀNĀ] LAK[ṢAṆĀ] による転義とどう違うのか。

さて、ŚUD. LAK. との差異を考える前に、SĀR.=SĀDH. LAK. による転義について、今一度その性格を明らかにしておく必要がある。

SĀR. LAK. による意味表出が行われるのは、本来まったく別の観念を表わす二つの語が、文法上同格に置かれる場合である。ここで二つの観念の間に生じる矛盾を除去するために、転義が起る。ところで、二つの語のうちで一方は叙述のテーマを指摘するわけであるから、これには転義は起らない。もう一つの語は、このテーマ対象を説明する語として置かれているわけであるから、その《本来の意味》が何であろうとも、ここでは、テーマ対象指摘語の表わす観念に適応する観念を表わさなくてはならない。したがって、二つの観念間の矛盾は、〈説明語〉の転義によって除去される。

少年の勇猛さを誇張して、“*śimho mānavakah*”（『少年はライオンだ』）と云う場合、述語の“*śimha*”に《本来の意味》『ライオン』をそのまま適用したのでは、主語の表わす観念『少年』との間に矛盾が生じる。そこで“*śimha*”は、この文脈の中で、《本来の意味》とはちがった特殊な意味を表わしていることになる。

さてこのように、本来それぞれ別の観念を表わす二つの語が文法上同格に置かれる場合、一方の語に転義が起るのは、SĀR. LAK. という意味機能が発動するからである¹⁾。この場合、転義の起る語の《本来の意味》を *viśayin* とし、この語に対して文脈が表示を要求する観念を *viśaya* として、SĀR. LAK. という特殊な意味機能が説明される²⁾。

例えば “*simho māṇavakaḥ*” という場合、述語 “*simha*” は、その《本来の意味》が何であろうと、主語 “*māṇavaka*” と文法上同格に置かれている以上、主語の表示する対象と同じ対象を表示することを、文脈によって要求されている。¹したがってこの場合、“*simha*” という語にとって、文脈によって表示を要求されている対象〈少年〉が *viṣaya* である。

ここでもし “*simha*” が、この文脈の要求だけに従って意味を表出するとしたら、この場合の *viṣaya* すなわち『少年』を、文脈の意味として表出することになろう。しかしながら、“*simha*” という語には、《慣習上の約束》(*saṃketa*) によって、『ライオン』という意味が定められているのである。どんな場合にも *saṃketa* を全く無視した語用法はあり得ない。ではこの二つの要因（文脈の要求と *saṃketa*）は、一つの語 “*simha*” の中でどのように働き、その結果表出される意味はどのような構造をもつのか。

この場合、文脈によって表出を要求されている観念『少年』を《重置の対象》(*āropa-viṣaya*) とし、この上に、*saṃketa* によって定められている意味『ライオン』が、*viṣayin* として、「重ね置かれている」(*āropyamāna*) とされる。

そこで “*simha*” という語の表わす意味は、二つの観念が重り合って、重複構造になっているわけである。この場合、聞き手は、“*simha*” という語から純粋な観念としての『少年』あるいは『ライオン』を得るのではなく、この語を通して、『少年』と『ライオン』との二重写しの映像を見るのである。

次に意味機能 *ŚĀDH. LAK.* によって意味表示が行われる場合はどうか。*SĀR. LAK.* による場合は、同格併置される〈テーマ対象指摘語〉の存在によって、〈説明語〉の転義に対する文脈の要求が了解される。ところが少年を指して、単に “*simho 'yam*” (『これはライオンだ』) という場合、《重置の対象》(*āropa-viṣaya*) は、語によって示されていないわけである。しかしながらこの場合も、猛獣ではなく少年が話題になっている以上、“*simha*” という語が猛獣ライオンを指しているのではないことに変りはない。“*simha*” は、この語が用いられる状況の中で、その意味表示に限定を受けているのである。この〈情況〉は、いわば広い意味での文脈であり、語の意味表示に対して、同様の支配力を有する。この場合 *viṣaya* は、〈情況〉によって表示を要求されている観念であるといえよう。しかしながら実際の文脈の中に *viṣaya* は語でもって示されていないので、「*viṣaya* は *viṣayin* の中に、吸収され、かくされている (*antaḥ-kṛta*)」²⁾ とされるのである。

したがって、*SĀR. LAK.* から区別して *ŚĀDH. LAK.* という別のカテゴリーをもうけた根拠は、*viṣaya* を指摘する語が文脈中に用いられていないということにすぎず、問題の語の意味機能に関しては、両カテゴリーの間に本質的なちがいはない。

さて問題は、*ŚUD. LAK.* と *SĀR. = ŚĀDH. LAK.* とのちがいをということであるが、KP の *kārikā* および *vṛtti* は、両者の差異について、直接には何も論じていない。そこでまず、*kārikā* における *upādāna* (《包含》) および *lakṣaṇa* (《指示》) の定義を、*SĀR. = ŚĀDH. LAK.* の定義と比較して、文脈の中で成立する特殊な意味が、《本来の

意味》とどういった関係を保っているかということに着目したい。

lakṣaṇa とは、定義によると、「《本来の意味》を放棄することによって、《他の意味》を成り立たせる場合である」⁴⁾ という。そうすると、“gaṅgāyām ghoṣaḥ” (『ガンジス河にある牛飼部落』) という文脈の中であって、“gaṅgā” という語の文脈の意味『(ガンジス河の) 岸』には、もはや《本来の意味》『(ガンジスの) 流れ』は残存していないことになる。〈牛飼部落〉は、〈岸〉の上にのみにあって、〈流れ〉の上にあるはずはない。この場合、《本来の意味》『流れ』は、それからの連想のもとに、『岸』の〈冷たさ〉〈清浄さ〉を《暗示》(*vyañjanā*) によって示すにすぎず、“gaṅgā” がここで提供する論理的価値とは一応無関係ということになる。

ところが *SĀR.=SĀDH. LAK.* の場合、文脈が要求する観念である *viśaya* が、語で示されているにせよ、「吸収されている」にせよ、《本来の意味》は、*viśayin* として、*viśaya* の上に置かれた状態で (*āropyamāna*) 保留される。少年を指して “*śimho 'yam*” という場合、《本来の意味》『ライオン』を完全に放棄して、『少年』という意味を純粋な観念として表示するのではない。『少年』という意味の中に、『ライオン』という意味が「吸収されて」、意味の重複体をなしているのである。

次に *upādāna* とは、「他の意味を含ませて、新しい意味を実現することである」⁵⁾ という。この場合、文脈の中で成立する意味は、《本来の意味》に他の意味を附加して、量的に拡大したものである。『油 (一般)』を指して “*taila*” という場合⁶⁾、*lakṣaṇa* の場合とはちがって、“*taila*” という語は、文脈の意味を実現するために 《本来の意味》『ゴマ油』を完全に放棄しているのではない。この語が本来表わす対象 〈ゴマ油〉は、新しい表示対象 〈油〉の特殊例にすぎない。したがって、《本来の意味》(『ゴマ油』) は、文脈の意味『油』=『ゴマ油』+『カラシ油』+ etc.) の中に、保留されているわけである。また “*kuntāḥ praviśanti*” における “*kunta*” の意味表示機能が *upādāna* だとされているのは、この場合の文脈の意味『槍を持つ男』が、『槍』+『男』という形で、《本来の意味》『槍』を量的に拡大したものだと言われるからである⁷⁾。

ところが *SĀR.=SĀDH. LAK.* の方は、同じように 《本来の意味》が保留されるといっても、*upādāna* の場合のように、表示対象を量的に拡大する場合ではない。少年を指して “*śimho 'yam*” という場合、“*śimha*” の文脈の意味は、《本来の意味》『ライオン』に新しい意味『少年』を附加して、量的に拡張されたものではない。『ライオン』および『少年』という二つの意味が、それぞれ純粋な観念として同一の次元に並び、『ライオン』+『少年』(『ライオンと少年』、『ライオンに乗った少年』) という形をとっているのではない。比喩手段としての対象と実際の叙述対象とは、全く別の次元に属するものであり、この二つの対象が、“*śimha*” という一つの記号によって指示されているにすぎない。ヴェーヒーカ人が朗唱している様子を叙述して、“*gauḥ paṭhati*” という場合⁸⁾、このことは一そう明らかであろう。

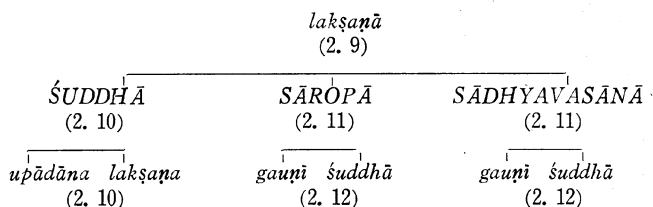
さて *Mānikyacaṇḍra* は、*Mukulabhṭṭa* を引用して、〈聞き手の意識〉に焦点をあ

て、*SĀDH. LAK.* と *ŚUD. LĀK.* との差異を指摘している。——「*SĀDH. LAK.* とは、[二つの意味が、それぞれ、]《重置の対象》(*āropa-viṣaya*)と《その上に置かれるもの》(*āropya viṣayin*)との関係にあって、[二つの意味の間に]差異が存在する場合に、[その二つが]極めて近いものとして、その同一性が理解される場合である」⁹⁾ といひ、さらに「*SĀDH. LAK.* の場合は、まず差異の理解があり、その後で同一性が理解される」¹⁰⁾ といふ。このように、意味機能 *SĀDH. LAK.* が発効して意味表示が行われる場合は、二つの意味を、*viṣayin* および *viṣaya* として明確に区別した上で、同一の記号(語)を通して、重り合った観念としてとらえるという操作が、聞き手の意識の中で行われるのである。

これに反して、「[*ŚUD. LAK.* に属する] *upādāna* の場合は、*āropya viṣayin* と *āropa-viṣaya* 》という【対立】関係が存在せず、同一性が本来的に (*mūla-tas*) 理解される」¹¹⁾ といふ。*SĀDH. LAK.* の場合は、差異の理解を前提として、同一性はその後で理解されるが、*upādāna* の場合は、この同一性が、本来的に直接に理解されるのである。そこで、「これら二つの場合(“*kuntāḥ praviśanti*”と“*gaṅgāyām ghoṣaḥ*”)においては、*āropya viṣayin* と *āropa-viṣaya* との【対立】関係に対して、意識が働かない」¹²⁾ のである。

2 *ŚUDDHĀ* と *śuddhā*

第三章で示した KP *kārikā* の *lakṣaṇā* 分類は、次のような図式で表わされる。



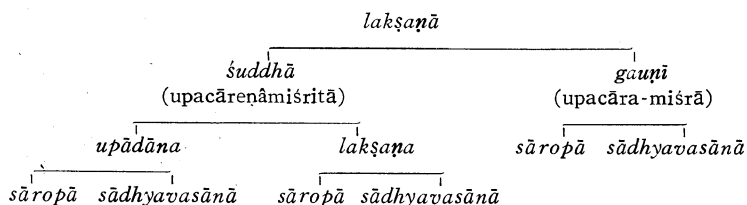
ここで一つの疑問が起こる。*ŚUDDHĀ* と *śuddhā* (すなわち, *kār.* 2. 10 の *śuddhā* と *kār.* 1. 12 の *śuddhā*) がそれぞれ別のカテゴリーを示すなら、なぜこのように同じ語を用いて混乱を招くようなことをしたのか。この二つは、はたして全然別のカテゴリーを示すものなのか。少なくともこの点に関するかぎり、Govindaṭhakkura の注釈から、明快な統一解釈が得られる。

ところで KP の *vṛtti* は、第一類 *ŚUD. LAK.* の語義を説明して、「*upacāra* を混合していないから (*upacārāmiśritatvāt*), *śuddhā* (清浄) といふのだ」¹³⁾ としている。そうすると *ŚUD. LAK.* は、*upacāra* を排除することによって、自らのカテゴリー領域を形成していることになる。では *ŚUD. LAK.* に対立するカテゴリー *upacāra* を混えた *lakṣaṇā* とは何か。

Gov. はこの *upacāra* を、＜類似という関係に基づく語義発動＞ (*sādrśy'-ākhyā-*

sambandhena pravṛtti) と解し¹⁴⁾, 2.10 śuddhā に対立するカテゴリー、〈upacāra を混えた lakṣaṇā〉を, gauṇī すなわち 〈類似関係に基づく lakṣaṇā〉とする¹⁵⁾。この解釈にとって非常に都合のよいことは, SĀR.=SĀDH. の下位亜種として, 2.12 において gauṇī と対立する śuddhā に, 2.10 の śuddhā と同一の概念 (類似以外の関係に基づく場合であること) を与え得るということである。これで, 同一の術語が同一のカテゴリーを示すという論述の原則に基づいて kārīkā を理解することができよう。

Gov. の解釈による lakṣaṇā 分類を図式化すれば次の通りである。なお, lakṣaṇā の種類が六つだということは, kārīkā に明記されているから, どのような解釈をとっても, 亜種の総数を変えることはできない。そこで彼は, 後にも述べるように, upādāna と lakṣaṇa をそれぞれ sārōpā および sādhyavasānā の二亜種に分けている¹⁶⁾。



ところが一方では, この分類図式に従うと, vṛtti の解釈のみに関しても, 一つの矛盾が生じる。

2.12 の vṛtti には, śuddhā SĀR.=SĀDH. として, 《結果と原因の関係》(kārya-kāraṇa-sambandha) に基づく場合の外に, 五つの 《関係》(sambandha) に基づく場合があげられている。すなわち, — “kva cit tādarthyaḥ upacārah” (ある場合には, tādarthya (用途関係) に基づく upacāra がある) — 等。(40, 41頁参照)

ここで tādarthya というのは, 〈あるものと, その為に使用されるものとの関係〉であり, たとえば, “indra” という語を, 『インドラ礼拝用の柱』という意味に用いる場合である¹⁷⁾。したがって, ここで用いられている upacāra という術語は, 〈類似以外の関係〉に基づく場合を示している。ところが Gov. は, 2.10 vṛtti の upacāra を, 〈類似関係に基づく場合〉と規定したはずである。したがって, 彼のこの概念規定に従って 2.12 vṛtti の upacāra を解釈しようとする, 矛盾が生じる。

近代のサンスクリット注釈 Bālabodhini は, lakṣaṇā 分類に関して Gov. に従っており, 2.10 v. および 2.12 v. の upacāra をそれぞれ異義用法だとして, 問題の矛盾を解決しようとする¹⁸⁾。Bb. はここで, upacāra に極めて広い概念を与えている Kamalākarabhaṭṭa や Prabhā の著者の定義を引用している¹⁹⁾。これに従うと, 2.12 v. の upacāra は, lakṣaṇā の同義語にすぎず, 2.12 v. の upacāra のように限定された概念を表わすのではなく, もっと広い概念 〈転義法による意味表出〉一般を示すことになる。このように解せば, 二つの upacāra の用例に関する Gov. の矛盾は, 一応解決されることになろう。

しかしながら、Gov. の注釈に関してさらに問題にしなければならない点がある。すなわち彼に従うと、たとえ *vr̥tti* そのものはうまく説明できるとしても、*kārikā* の論述組織を非常に不自然に解釈することになり、*kārikā* と *vr̥tti* の間にある種の不一致を作ることになるからである。

第三章の冒頭で論じたように、*kārikā* 2.10 の *ŚUD. LAK.* に同格で対立するカテゴリーとして、次の行 *kārikā* 2.10 の先頭に示されているのは *SĀR. LAK.* である。*kārikā* に忠実であるかぎり、*ŚUD. LAK.*—*SĀR. LAK.* の対立は疑い得ない。ところが Gov. が *kārikā* 2.10 の *ŚUD. LAK.* に同格で対立させているのは、やっとう四行後の *kārikā* 2.12 第三 *pāda* に、*SĀR.=SĀDH. LAK.* の下位亜種として示される *gauṇī* なのである。彼は *kārikā* に見られる *ŚUD. LAK.*—*SĀR.=SĀDH. LAK.* の対立を全く無視して、*śuddhā—gauṇī* という対立を最上位に置いている。その結果 *sāropā—sādhyavasānā* の対立が下位に置かれる。しかもこれが、*upādāna=lakṣaṇa* の領域にまで持ち込まれている²⁰⁾。このように *upādāna* および *lakṣaṇa* がそれぞれ *sāropā* と *sādhyavasānā* に分割されるということは、*kārikā* をどう解釈したところで導き出せるものではない。もしそういうことになれば、*kārikā* の教える各カテゴリーの定義がすべて存在理由を失ってしまうことになるだろう。

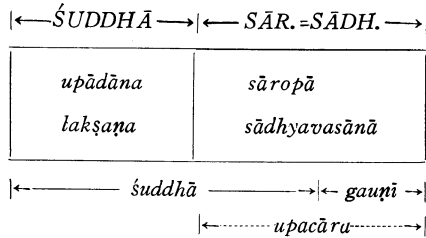
このような Gov. の解釈が、たとえ *kārikā* の図式に一致しないにしても、伝統的にこのような解釈が行われていたことは無視できない。しかも Pradīpa は代表的な KP 注釈の一つであり、優れたものとされているのである。彼の解釈が、たとえ部分的には不合理なところがあるにしても、*gauṇī—śuddhā* の対立でもって、*lakṣaṇā* の全域を二分している点は注目すべきである。こうすることによってのみ、*śuddhā* という術語を、*kārikā* の中で統一的に理解することができるからである。

一方 *kārikā* が、*ŚUD. LAK.*—*SĀR.=SĀDH. LAK.* の対立を明確に示しており、各カテゴリーの定義を比較すればその対立理由が得られ、さらに聞き手の意識に基づいてその対立根拠を教える Māṇikyaśāstra の古い注釈がある以上、*ŚUD. LAK.*—*SĀR. LAK.*—*SĀDH. LAK.* の対立を否定することはできない。

けっきょく *śuddhā* という術語で示されるカテゴリーは二つの面側を持っているのであるが、*kārikā* の分類図式は次のように理解することができる。

- i) <類似以外の関係> に基づく *śuddhā* には、*upādāna* および *lakṣaṇa* の二つの場合があり、この二つは、Māṇikyaśāstra の指摘する根拠に基づいて、*sāropā=sādhyavasānā* と対立する。
- ii) この対立を図式化するにあたって、*upād.=lak.* をまとめて示すために、この二つを包括する *śuddhā* という術語をあてた。こうして、*upād.=lak.*—*sār.=sādh.* の対立は、*ŚUD. LAK.*—*SĀR. LAK.*—*SĀDH. LAK.* として示された。
- iii) しかしながら、<類似以外の関係> に基づく *śuddhā* の領域は、*upādāna* と *lakṣaṇa* だけではなく、*śuddhā sāropā* および *śuddhā sādhyavasānā* をも包括するものである。そこで後の部分の *śuddhā* は、図式の上で、*upādāna* と *lakṣaṇa*

(ŚUD. LAK.) から離れて、ŚUD. と対立する SĀR.=SĀDH. の下位亜種になる。



このように解釈すれば、kārikā の図式をこわさずに、2.10 śuddhā と 2.12 śuddhā との一致する概念場を見出すことができ、lakṣaṇā 全域を二分する śuddhā—gauṇī の対立が理解できる。さらに 2.10 v. と 2.12 v. の二つの upacāra に同じ概念をあて統一的に解釈することができよう。(次節参照)

3 kārikā=Samketa と vṛtti=Pradīpa 間の不一致

少くとも kārikā の解釈に関するかぎり、以上のような結論を得ることができる。そうすると、すでに述べた Gov. の注釈 Pradīpa は、kārikā の分類図式をまちがって解釈していることになる。なぜなら Pd. は ŚUD. LAK. — SĀR. LAK. — SĀDH. LAK. の対立を全く無視しているからである。したがって、Pd. の図式解釈の出発点となっている 2.10 v. upacāra の概念規定そのものが誤りということになろう。なぜなら Pd. は、この upacāra を「類似関係に基づく語義発動」と解し、これを排除するカテゴリー 2.10 śuddhā を、単に「類似以外の関係に基づく場合」としか規定していないからである。

では、もし Pd. の upacāra 規定が誤りであるなら、第二節末に結論した kārikā 解釈を正当化するために、2.10 v. の upacāra をどう規定すればよいのか。

この解答は、Mānikyācandra の注釈 Samketa に求めることができる。すなわち Sk. は、「gaur vāhikah」において、ある対象が他の対象に upa-car- される。しかしながら upādāna と lakṣaṇa の場合は、このようなことが起らない²¹⁾と述べている。したがって Sk. は upa-car- という語を用いて、「二つの観念の重なり」を説明しているのであり、これは第一節で論じた「ŚUD. LAK. — SĀR.=SĀDH. LAK. の対立根拠」と一致する。

さてすでに述べたように、Sk. は〈聞き手の意識〉に焦点をあてて ŚUD. LAK. と SĀDH. LAK. の差異を論じているが、ここの議論は Mukulabhaṭṭa からの引用に基づいている。

ところで九世紀の学者 Mukulabhaṭṭa は、lakṣaṇā の分類に関して、次のように述べている。

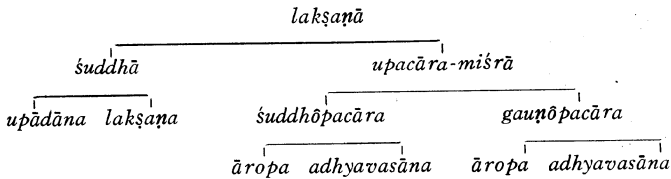
śuddhōpacāra-miśratvāl lakṣaṇā dvi-vidhā mātā //2//
 upādānāl lakṣaṇāc ca śuddhā sā dvi-vidhōditā /
 āropādhyavasānābhyām śuddha-gauṇōpacārayoh //4//

pratyekaṁ bhidyamānatvād upacāraś catur-vidhaḥ /

—Abhidhāvṛttimātrikā—²²⁾

一行目から, *lakṣaṇā* は *śuddhā* と *upacāra-miśrā* の二つに分けられる。二行目から, *śuddhā* は *upādāna* と *lakṣaṇa* の二つの下位亜種を有する。三行目および四行目から, *upacāra* は, 二つの下位亜種 *śuddhōpacāra* と *gauṇōpacāra* がそれぞれ *āropa* および *adhyavasāna* に分けられるから, 合計四つの亜種を有することになる。

したがって次のように図式化される。



KP kārikā の *lakṣaṇā* 分類は, これをほとんどそのまま受けついだものであり, Saṃketa も同じ線にそって *upacāra* という術語を理解している。この点に関して, Mukulabhāṭṭa—KP kārikā—Saṃketa という一つの系列が見られる。この立場は, *lakṣaṇā* を分類するにあたって, <文脈的意味の構造>, すなわち文脈の意味が重複構造をとっているかどうかという事を最も重要な分類基準とし, <本来の意味との結びつき> は, 二次的な基準としか考えない。

他方 Pd. は, *upacāra* を「類似関係に基づく語義発動」とし, *lakṣaṇā* 分類において <本来の意味との結びつき> を最も重視し, *gauṇī*—*śuddhā* の対立を最上位に置いている。この立場は, 上に見た系列から明らかに離れている。なぜこのような立場がでてきたのか。これを考えるためには, *śuddhā lakṣaṇā* をめぐる KP vṛtti の論述を今一度検討しなければならない。

vṛtti ad 2.10 は, *śuddhā lakṣaṇā* を “*upacāreṇāmiśritatvāt*” と定義した後で, 次のように論じている——「“*gaṅgā*” という語によって, 『岸』という意味が表わされるとき, [岸が] それ (流れ) と同じものであると理解される場合にのみ, 話者の云わんとする <意図> が理解されるのだ。その岸が単に (ガンジスの) 流れと隣接していると理解されるだけなら, いったい *lakṣaṇā* は, “*gaṅgā-tate ghoṣaḥ*” という本来的な語の意味表示とどう違うのか」²³⁾——。このように, *upādāna* および *lakṣaṇa* の場合も, <本来の意味> (『流れ』) と文脈的意味 (『岸』) とが同じものとして理解され, 両者の間に <隔離性> (*tāṭasthya*) は存在しないと主張する²⁴⁾。

しかしながらこの議論は, *abhidhā* の場合と比較して *lakṣaṇā* 機能の一般的性格を説き, それを下位亜種 *upādāna* および *lakṣaṇa* の場合にあってはめて論じたものにすぎない。*sāropā*=*sādhyavasānā* との差異を念頭に入れて, *upādāna*=*lakṣaṇa* の特殊な性格を論じたものではない。ここでわざわざこのような議論を持ち出したのは, 他の学者の

見解に反論するためにすぎないのである。

ところで、この他の学者とは、外ならぬ Mukulabhaṭṭa なのである²⁵⁾。しかも、反論する側の KP vṛtti が lakṣaṇā の一般的機能を敷衍するため śuddhā にふれているのに対し、この反論の直接の対象となる Mukulabhaṭṭa の論議は、まさに他の lakṣaṇā カテゴリーとの差異を論ずるために、śuddhā の機能を規定したものなのである。——「“gaur vāhikaḥ”においては、＜類似という結びつき＞によって、śakyārtha と lakṣyārtha の間の同一性 (abheda) が理解される。ところが śuddhā の場合は、vācyārtha と lakṣyārtha の間に差異 (bheda) が理解される」²⁶⁾——。

すなわち Mukulabhaṭṭa は、「śuddhā lakṣaṇā とは二つの意味 (mukhyārtha と lakṣyārtha と) が＜離れている場合＞(taṭasthe) である」²⁷⁾ という。特定の文脈の中で、『流れ』が『岸』に、あるいは『槍』が『男』に転義されるとしても、二つが同じものだと意識されず、『岸』『男』はやはり『流れ』『槍』とは違ったものとして理解される。

ところが KP vṛtti は、「upādāna と lakṣaṇa において、このような《隔離性》は存在しない」という²⁸⁾。

この二つの議論の差異はどこに原因があるのか。基本的には、《隔離性》という概念を用いる際の態度が、両者の間で全く異っているのである。Mukulabhaṭṭa が、文脈の意味の論理的価値のみに着目しているのに対し、KP v. は、その文体的価値に着目している。Mukulabhaṭṭa は、《本来の意味》とは違った論理的価値をもつものとして、lakṣyārtha を見ている。“gaṅgā”および“kunta”の lakṣyārtha『ガンジス河の岸』および『槍を持つ男』は、それぞれの《本来の意味》『ガンジスの流れ』、『槍』から、論理的には独立した純粋な観念である。Mukulabhaṭṭa は、mukhyārtha と lakṣyārtha との論理的価値の差を指摘するために、tāṭasthya という語を用いたのである。一方 KP v. の指摘せんとしているのは、lakṣyārtha が理解される場合、文脈の中で定められる論理的価値の外に特殊なニュアンスが理解されるということ、lakṣyārtha には特殊な文体価値があるということである。すなわち KP v. によれば、「mukhyārtha から隔離したものとして lakṣyārtha を理解したなら、話者の云わんとする《意図》(prajñā) が理解されない」という。特定の文脈の中で“gaṅgā”の意味を『ガンジス河の岸』として理解する場合、それを単に《本来の意味》から隔離した論理的価値としてのみ理解するなら、“gaṅgā-taṭa”という語を理解するのと同じことになる。論理的価値の外に、＜冷たさ＞＜清浄さ＞というニュアンスの理解がともなってはじめて、話者の《意図》が実現されるのである。このようなニュアンスは《本来の意味》からの連想によって得られる。したがって、文体的価値という点において、lakṣyārtha は mukhyārtha から断絶したものではないことになる。この立場に立つて KP v. は、upādāna および lakṣaṇa における tāṭasthya を否定したのである。

kārikā の分類は、ほとんどそのまま Makulabhaṭṭa に従っているにもかかわらず、vṛtti はここで、わざわざ異った見地に立つて、Mukulabhaṭṭa を否定する姿勢をとっている。

ここで *vr̥tti* の意図するところが何であろうと、結果的には、*śuddhā* における《隔離性》が否定されることになり、〈意味構造の重複性有無〉に基づくカテゴリー区分に関心が向けられなくなる。それに代って、〈本来の意味との結びつき〉という分類基準が最も重んじられ、*śuddhā-gauṇī* の対立を最高位に置く Pd. の図式が可能になる。

ちなみに、問題の *vr̥tti* を引用すれば、次の通りである。

[*upādānaś ca lakṣaṇaś ca,*] *ubhaya-rūpā cēyaṁ śuddhā, upacārāmiśritatvāt, anayor bhedayor lakṣyasya lakṣakasya (=vācyasya) ca na bheda-rūpaṁ tāstasthyam.*²⁹⁾

ここで *vr̥tti* が、意識的に、*kārikā* とは違った見地から、分類図式を打ち立てようとしているとは断定できないだろう。*vr̥tti* が、*upādāna* および *lakṣaṇa* における *tāstasthya* を否定したのは、ここで *lakṣaṇā* の一般的性格を確認したにすぎないと云えよう。*Mukulabhaṭṭa* の主張する *upād.=lak. sār.=sādh.* 間の差別根拠を、直接に否定したのではないのであろう。しかしながら、少なくとも、この *vr̥tti* は、後代注釈者の関心を、*śuddhā-sāropā* の対立からそらさせる要因となっている。たとえば Pd. は、“*na bheda-rūpaṁ tāstasthyam*” という *vr̥tti* を注釈するにあたって、*lakṣaṇā* の一般的性格の確認という立場から全く逸脱して、*śuddhā-sāropā* の差別根拠そのものを否定するに至っているのである。すなわち、「*sāropā* には *abheda* が理解され、*śuddhā* には *bheda* のみが理解される」という見解は誤りだとしている³⁰⁾。したがってこのことから当然、*śuddhā lakṣaṇā* に対立する *upacāra-miśrā lakṣaṇā* を、〈*abheda* が理解される *sāropā lakṣaṇā*〉とはせず、〈類似関係に基づく *gauṇī lakṣaṇā*〉と解することになり、さらに *upacāra* を、「類似関係に基づく語義発動」と規定することになるのである。そしてここに、*kārikā* の分類図式とはかなり異なる図式ができあがるのである。

4 類似以外の関係に基づく *lakṣaṇā* (附)

以上論じたことから明らかなように、KP *kārikā* の図式において第二類および第三類の下位亜種とされている *śuddhā SĀR.=SĀDH.LAK.* は、一方では *ŚUD.LAK.* に対立する *SĀR.=SĀDH.LAK.* に包括され、他方では *upād.=lak.* と共に、一つのカテゴリー〈類似以外の関係に基づく *lakṣaṇā*〉を形成して、*gauṇī lakṣaṇā* と対立する。

第三章でこのカテゴリーを論じたときは、《原因結果の関係》(*kārya-kāraṇa-sambandha*) のみをあげたのであるが、KP v. はその外に、次のような四つの *sambandha* を教えている。

a) *tādarthyā* (用途関係)

“*indra*” という語が、『インドラ礼拝用の柱』(*indrārthā sthūṇā*) という意味に用いられることがある³¹⁾。

『インドラ神』→『インドラ礼拝用の柱』

《話者の意図》：礼拝用の柱も、インドラ神そのものと同じように崇敬さるべきこと。

用例——〈インドラ礼拝用〉の柱を指して, “amī indrāḥ” (『あれらはインドラだ』) という場合³²⁾。

b) *sva-svāmi-bhāva* (主人と被使用人との関係)

“rājan” という語が『王の家来』(*rājakiya puruṣa*)を表わすことがある³³⁾。

『王』→『王の家来』

《話者の意図》: 家臣の命令も, 王の命令と同じく, 犯すべからざるものであること (rājavad-alaṅghya-śāsanatva)。

用例——王の家臣が歩いているのを見て, “rājā 'sau gacchati” (『あの王様が行く』) という場合³⁴⁾。

c) *avayavāvayavi-bhāva* (部分と全体との関係)

“agra-hasta” という合成語が, *tatpuruṣa* ではなく, *karmadhāraya* に用いられることがあるが (先端なる *hasta*), この場合, 本来は『ヒジから指先まで』を表わす “hasta” がその先端部のみを表わしている³⁵⁾。

『手 (ヒジから先)』→『手さき』

《話者の意図》: *hasta* の先端部分も, *hasta* 全体と同じように強力なこと。

用例——手の先端部分のみを指して, “hasto 'yam” (『これは手だ』) という場合³⁶⁾。

d) *tātkaṛmya* (仕事の同一性)

大工カーストの生れでない者, たとえばバラモンでも, 森で仕事をするゆえに, “takṣan” (大工) と呼ばれることがある³⁷⁾。

『大工』→『大工仕事をする大工カースト以外の人』

《話者の意図》: 大工カーストに属さぬにもかかわらず, 大工の技術に熟達していること。

用例——バラモンを指して, “takṣā 'sau” (『あの人は大工だ』) という場合³⁸⁾。

以上四章にわたり, *lakṣaṇā* について論じた。これを KP でいえば, 2.9 から 2.12 にいたる四つの *kārikā* を検討したことになる。*lakṣaṇā* に関して次に問題にすべきは, *prajayana* の意味機能ということである。特定の文脈の中で, “gaṅgā” が『ガンジス河の岸』という文脈の意味を表出する場合, 論理的価値の外に, 〈冷たさ〉〈清浄さ〉といった特殊なニュアンスが表われる。これは, 語のいかなる機能によるものか。このことは *kārikā* 2.13 以下で扱われているのであるが³⁹⁾, 語の第三の意味機能《暗示機能》(*vyañjanā, dhvani*) の問題であるので⁴⁰⁾, 一応本稿から切り離し, *dhvani* 論の一部として別に論じる。

また, *lakṣaṇā* による表現は, 特殊な表現効果を意図する技巧表現であるが, 意味機能としての *lakṣaṇā* は, 修辞学本来の対象である 〈詩的技巧〉としての *alaṅkāra* と, どういう関係にあるのか。この問題についても, 稿を改めて論じたい。(完)

1) KP 2.11: *sāropā 'nyā tu yatrôktau viṣayī viṣayas tathā,*

vṛtti ad ibid.: yatra sāmānādhikaraṇyena nirdīśyete, sā lakṣaṇā sārōpā.

前号15頁参照。なお同頁20, 21行で, *viśayin* を「転義の主体」、*viśaya* を「転義の対象」と訳したが、これは不正確であるので取り消す。この二つ術語は *métaphore* における意味の二重構造を説明するために、重複の意味を構成する二つの要素（その語が本来指示すべき対象と、文脈の中で当然指示さるべき対象と）を示すものにすぎず、「主体と対象」というような関係を示すものではない。

- 2) Bb. ad ibid.: sārōpēti āropeṇa saha vartata iti sārōpēty arthaḥ. 'viśaya-viśayinor bhedenōpanyāso 'tr' āropa-padārthaḥ' iti Pradīpa-kārāḥ. (p. 47, l. 32 ff.)
- 3) KP 2.11: viśayy-antaḥ-kṛte 'nyasmin sā syāt sādhyavasānikā. 前号p.21参照。
- 4) KP 2.10: parārthaṁ sva-samarpaṇam...lakṣaṇam... 前号 p.14. 参照。
- 5) KP ibid.: sva-siddhaye par'-ākṣepaḥ...upādānam...; 前号 p.14, l.33ff. 参照。
- 6) SD v. ad 2.10, p. 10, l. 20; 前号 p.14, l.13 ff. 参照。
- 7) KP v. ad 2.10: ...kuntābhīr...sva-samyoginaḥ puruṣā ākṣipyante,
- 8) Bb. ad KP 2.11: evaṁ 'gauḥ paṭhati' 'gām pāṭhaya' ity-ādy apy udāharaṇam ūhyam. (p. 49, l. 9)
- 9) Sk. ad KP 2.10: Mukulasyāpy ado 'numatam. atrōcyate. yatr' āropa-viśaya-bhāvatayā atyant'-āsanatvena bhedē saty abhedas tatra sādhyavasānatā. (p. 19, l. 28 ff.)
- 10) ibid.: pūrvatra (=sādhyavasānāyām) tu pūrvam bheda-pratitīḥ paścād abheba-pratipattīḥ. (p. 20, l. 7)
- 11) ibid.: yatra tv āropy'-āropa-viśaya-bhāvaṁ vinā mūlata evābheda-pratitīḥ tatrōpādānena lakṣaṇā. (p. 19, l. 30)
- 12) ibid.: anayor udāharaṇayor āropy'-āropa-bhāvaṁ prati cittam eva na dhāvatīty atra sacetasāḥ pramāṇam. (p. 20, l. 8)
- 13) KP v. ad 2.10: ...iyam śuddhā, upacāreṇāmiśritatvāt.
- 14) Pd. ad ibid.: upacāraś ca sādṛśya-sambandhena pravṛttiḥ. (p. 43, l. 13)
- 15) ibid.: upacāra-miśrā hi gaunīty ucyate. (p. 43, l.13)
- 16) ibid.: upādāna-lakṣaṇā lakṣaṇa-lakṣaṇā ca. te api pratyekaṁ sārōpā sādhyavasānā cēti dvi-vidhe iti śuddhā-bhebās catvāraḥ. (p. 39, l. 11 ff.)
- 17) KP v. ad 2.12: kva cit tādarthāyād upacāraḥ, yathēndrārthā sthūnēndrāḥ.
- 18) *upacāra* の術語概念は、修辞学史の中で、非常に浮動しており、各修辞学者の間で、その概念規定がかなり違っている。この問題について Poona Orientalist 第一号に論文があるというが、雑誌が入手できないため、未見である。H. D. Sharma; "The meaning of the word *upacāra* according to Gotama and the rhetoricians", PO I. 1, Apr. '36, pp. 26-33.
- 19) Bb. ad ibid.: upacāro lakṣaṇēti Kamalākara-bhaṭṭāḥ, upacāro lakṣaṇayā

sāmānādhikaranyena prayoga iti Prabhā-kṛtaḥ. (p. 53. l. 15)

- 20) Pd. ad KPv. 2.10 : te (=upādānaś ca lakṣanaś ca) api pratyekaṁ sārōpā sādhyavasānā ca, (p. 39. l. 12)
- 21) Sk. ad ibid. : yathā 'gaur vāhikaḥ' ity atra vastv-antare vastv-antaram upacaryate. na tathā atra (=upādāne ca lakṣaṇe ca).
- 22) Abhi° Mā° ed. NSP, 1916 ; この部分, Sharma's Notes on KP, p.85に原文引用。
- 23) KP v. ad 2.10 : taṭādinām gaṅgādi-śabdaiḥ pratipādane. tattva-pratipattau hi pratipipādāyīṣita-prayojana-saṁpratyayaḥ. gaṅgā-sambandha-mātra-pratītau tu, 'gaṅgā-taṭe ghoṣaḥ' ity mukhya-śabdābhidhānāl lakṣaṇāyāḥ ko bhedaḥ?
- 24) ibid. : anayor bhedayor lakṣyasya [ca] lakṣakasya [=vācyasya] ca na bheda-rūpaṁ tātaṣṭhyam.
- 25) Bb. p.46, 脚注 : 'na bheba-rūpaṁ tātaṣṭhyam' iti vacanena Mukulabhaṭṭa-mataṁ dūṣitam iti Viśvanātha-kṛte Kāvyaaprakāśadarpaṇe spaṣṭam.
- 26) Pd. ad ibid. : 'gaur vāhikaḥ' 'gaur ayam' ity-ādaḥ, bhede 'pi śakya-lakṣyayor abhedāḥ pratiyate. na tu 'gaṅgāyām ghoṣaḥ' ity-ādaḥ. tatra bheda-mātra-pratīter iti. (p. 43. l.16~p. 44. l.6) この見解の主張者の名前を, Pd. はあげてはいないが, 明らかにこれは Mukulabhaṭṭa の立場である。

cf. taṭasthe lakṣaṇā śuddhā, syād āropas tv adūrage / nigirṇe 'dhyavasānām tu, rūḍhi-āsannataratvataḥ // (Abhi° Mā°, ed. NSP, p. 9.)

- 27) Abhi° Mā° p. 9 : taṭasthe lakṣaṇā śuddhā,
- 28) 注 24) 参照。
- 29) KP v. ad 2.10.
- 30) Pd. ad ibid. : ...ity-ādaḥ (sārōpāyām ca adhyavasānāyām) ... abhedāḥ pratiyate, na tu [śuddhe], tatra bheda-mātra-pratīter iti... tad... asat.
- 31) KPv. ad 2.12 : kva cit tādarthyaḥ upacāraḥ, yathēndrārthā sthūṣēndraḥ.
- 32) SD v. ad 2.9 : indrārthāsu sthūṇāsu 'amī indrāḥ' (P.10, l.11)
- 33) KP v. ad 2.12 : kva cit sva-svāmi-bhāvāt, yathā rājakiyaḥ puruṣo, rājā.
- 34) SD v. ad 2.9 : rājakiye puruṣe gacchati, 'rājā 'sau gacchati' iti. (P.10)
- 35) KP v. ad 2.12 : kva cid avayavāvayavi-bhāvāt, yathā 'agra-hasta ity atrāgra-mātre 'vayave hastaḥ. cf. Pd. ad ibid. : karmadhāraye 'agra-hasta iti....
- 36) SD v. ad 2.9 : yathā vā—agra-mātre 'vayave, 'hasto 'yam'. (P.10, l.11)
- 37) KP v. ad 2.12 : kva cit tātkarmyāt, yathā 'takṣā takṣā.
- 38) SD v. ad 2.9 : brahmaṇe 'pi 'takṣā 'sau'. (P.10, l.12)
- 39) この問題は, KP kārīkā 2.13 から 2.18 に至る六つの kārīkā で扱われている。
- 40) この vyañjanā は, lakṣaṇā が発動するとき随伴して作用するわけであるから, lakṣaṇā-mūlā vyañjanā と呼ばれ, KP ullāsa 3,4 において複雑な体系に組織化される abhidhā-mūlā vyañjanā に対立するものである。

戦後インド学の主要労作 (2)

文 学 史 インド文学史の敘述に文芸美の探究が全く問題外であるというのではないが、世界の学界がこの点で先ず要望するのは、あらゆる時代と様式とにわたる既知の原典に対し、適確な内容紹介と位置づけと、そして従来の研究における問題点の明示とを与え、且つ主要な校本・訳書・研究業績の註記によって、何れの分野の専攻者にも信倚すべきビブリオグラフィーを提供することであろう。さてこの様な意味での標準的な文学史が過去にあったとすれば、それは第一に A. Weber: *Vorlesungen über indische Literaturgeschichte* (1852: 第二版 1875 に基く英訳 *History of Indian Literature*, 1878) であり、次いで以後の研究の発展と文献の増加に応じて、前者に代ることとなった M. Winternitz: *Geschichte der indischen Literatur* ('04-'22: 略記 *GIL*) 三巻であること申すまでもない。インド文献学の夫々の歴史的段階を代表するものとして、これら両著は——少くも上記の見地からは——他のどの文学史とも同一の平面におかれ得ぬものであろう。

周知の様に *GIL* は、程なくインドで英訳されカルカッタ大学から出版されることとなったが、この際 Winternitz は自身で訳業の監修に当たった外、主として '22 年以後の文献増加に基く所要の補訂を、この英語版で果そうと努めた。かくて著者の意図は第一・二巻に関する限りは達成され、*History of Indian Literature* (tr. S. Ketkar, I '27, II '33: 略記 *HIL*) として現れたのであるが、インド内での研究業績が特に多い部門を覆う第三巻については、英訳増訂版は遂に形をとることなく Winternitz の死 ('33) に及んだ。その後、監修の地位に適任の後継者を得がたく、且つ西欧学界との連絡も失われて、カルカッタ大学は第三巻の英訳を放棄し、寧ろインド人学者の執筆によって事実上この巻を更新するが如き、二冊の新文学史を計画することとなった。

この事業の主率は高名な哲学者 S. N. Dasgupta の手に委ねられ、その第一冊として *kāvya* と *ālaṃkāra* を併せ扱う 700 頁の大冊、Dasgupta = De: *History of Skt. Lit., Classical Period*, Vol. I* ('47) [*IHQ* '48 Upadhye; *JRAS* '49 Burrow; *JAOS* '52 Emeneau] の形で出版された。然しその出来ばえは遠く期待を裏切るものであり、インド内にてさえ世評は余り芳しくなかったかと思われる。この巻における二人の執筆者の「共著」の性質自体が先ず問題で、いわば総論の担当者たる Dasgupta と各論の担当者 S. K. De との間には、文学史敘述の態度からして対蹠的な差があるばかりでなく、前者が別に *Editor's Notes* として相当の紙幅を加えた結果は、個々の研究上の争点に触れて両者が全く相反する見解を表明する例さえ少なくない。例えば前者が採る *Bhāsa—Kālidāsa* (前 1 世紀)——*Āśvaghoṣa* の図式に対し、後者は *Āśvaghoṣa—Bhāsa—Kālidāsa* (後 4 世紀) の如く。文学鑑賞に属する記述が豊富なのは、インド人学者にして

初めて可能な貢献と歓迎し得ようが、Dasgupta の文学論は余りにも独自の抽象的思弁の色が濃く、作者・作品の年代決定に関しては(彼の哲学史の大著についても時に指摘される)意識の薄弱と主観的独断の弊を免かれない。Winternitz に洩れたインド側の材料と 20 年代以降の新資料を知らせる点では貴重であるが、反面 *GIL* の書誌的側面を再録する点では杜撰と云わざるを得ず、殊に巻末索引の体裁は一見して異様なまでに不適當である。

上記の一冊だけでカルカッタ新文学史の企画は完全に頓坐した様で、その内でも好評を博した S. K. De の執筆部分だけが、以後 *History of Skt. Lit. (Prose, Poetry and Drama)* として引続きカルカッタ大学から出版されている。同書は内容上、今日おそらく最上の *kāvya* 文学史であろうが、'47 年の前著の一部を切離してそのまま重刷したものであるため、index も付せられておらずでは利用に全く不便である。Skt. 文学の文芸面で——特に *History of Sanskrit Poetics* の著者として——つとに令名高く、他方にベンガル・ヴィシュヌ派の研究者としても聞える S. K. De 教授の労作は、この兩三年しきりに再刊・新刊あいつぐ様であるが、幸いにその一つ *Development of Skt. Lit.* * ('60) が、過去に発表された論考の集録でなくて一貫した文学史であるとするならば、前書の不便は多分に解消されるであろうか。但し(筆者未見であるが)察する所、この新著はそれ程の大冊とは思われない。

この様にしてカルカッタの関する限り、*GIL* を更新する文学史の生れる見込みは、先ず完全に消失したわけである。かえって同地で近年になって *HIL* の再版が見られ (Vol. I. pt. 1: Intro. & Veda, '59), 更に思いがけなく *GIL* 第三巻の一部英訳 (tr. H. Kohn, *HIL* Vol. III fasc. 1: Ornate Poetry, * '58) が出はじめたことも、如上の経緯と無関係でないかも知れぬ。(同じく第三巻の英訳且つ “brought up to date” たるものが、一時 Motilal 書店から予告されていたが、果して刊行されたのであろうか。特記された点については、訳者 Subhadra Jha の他の訳業——Pischel, *Prakrit-Grammatik*——に徴して、むしろ疑わしく感ぜられる。) 勿論インドで出版される大小の文学史は数多く、V. Varadachari: *History of Skt. Lit.* * ('56) [*JA* '57 Renou] の如く通史としてすぐれたものもあるし、H. R. Aggarwal: *Saṃskṛtasāhityetiḥāsa* (2 pts., '51) なども Skt. で書かれた文学史という好奇心の対象に止まらず、内容は多少とも妥当且つ豊富であるが、而も Keith や Macdonell の文学史の版が戦後もインドで重ねられるのは、これら西欧の先学の名著に対しなおインド人学徒の需要があることを物語るであろう。然しながら *GIL* 更新という desideratum に対処して、特に第三巻(古典 Skt. 文学の全域)、加えて第二巻の一部(ジャイナ文献)と第一巻の後半(叙事詩・プラーナ)の範囲では、その任に当り得べき権威者を多く擁するのは明らかにインドの学界である以上、新たに何らかの計画がこの国で具体化されるのを望みたい。その時まで、重版を差当って特に希望すべきは、古典 Skt. 文学の文献資料を屢々マニユスクリプトにまで触れ最も豊富に提供する、M. Krishnamacharya: *History of Classical Skt. Lit.* * ('37) である。

所でその様な計画が起るとして、必ず中心に立つべきインドきっての碩学と、誰しもの想倒するであろう恐らく第一の人 P. K. Gode 教授が、去る五月に急逝されたことは痛惜

にたえない。同氏の *Studies in Indian Literary History* (3 vols., '53-'56) [JA '55 '56 Renou; *Adyar Lib. Bul.* '55 K. K. Raja; *JRAS* '56 Burrow; '57 ZDMG Alsdorf, *JAOS* Sternbach] は、表題から文学史そのものを想っては誤りであるが、氏の有名な年代考証の論考 450 編を集録して、文化史・文学史の何れの面にも貴重な新資料の倉大な宝庫を形成する。論文の多くは著作年代の先後や同名人物の異同を考察し、またあらゆる種類のインド習俗——様々な祭りの沿革や、煙草・茶・紙などの使用の歴史といった——を過去の文献に辿り、屢々未刊の写本からの引用・訳出をも含んでいて、久しく BORI の司書として畏敬された氏の博学が余す所なく発揮されるのである。なお上記の書には、N. A. Gore, A. D. Pusalkar 両氏により行き届いた索引が作成されている。

一方、戦後に欧米で出たインド文学史としては、V. Pisani: *Storia delle letterature antiche dell' India** ('55) [*JRAS* '57 Rylands] が殆んど唯一と云ってよいであろうか。大きさからは Macdonell の文学史に当る程度であるが、Skt. 文学に限らず近代諸語の文学までを収め、Pāli 及び Prakrit 文学史には特に詳しい由である。但し手頃な文学史の manuel というには、例えば *Gitā* を込め全 *Mahābhārata* を単一の著者の作とするなど、やや個人的な見解が打ち出されすぎきらいが指摘されている。L. Renou: *Littératures de l'Inde* ('51) は同じ範囲についてより限られた紙幅で——先般邦訳された *Hindouïsme* ('51) と同様 *Que sais-je?* 文庫——一般読者を対象とするが、また同時に我々にとって必要最小限の知識を凝縮するものである。但し書誌的利便という点からは、寧ろ同じ著者の *Littérature sanskrite* ('46) なる小冊子をあげたい。Veda と仏教とを除き、戦争直前までに知られた重要作品はすべて、著者名によってと両様に辞書的に引けるわけで、簡潔な解説と評価と共に、ヨーロッパ語訳のある限りはその主なものを付記している。

校本・訳書の出版状況を知るためにだけでも、写本・蔵書のカタログが常に極めて有用である。所で各国の主要な manuscript collection には何れも大部な descriptive catalogue が刊行され、それらをすべて整備することは我々の資力を遙かに越える筈である以上、往年の Th. Aufrecht: *Catalogus Catalogorum* (1891-'03) 三巻に代るべき New Cat. Cat. が現われれば、我々に何よりの救いであろう。それが Winternitz, *GIL* の更新以上に大事業であること明かであるが、幸いにも正にその人を得て、前回に触れた如くマドラスの V. Raghavan 教授がこの仕事に当たっている。ただ予定される十巻の内、既に出たのは a の項を覆う New Catalogus Catalogorum, Vol. I* ('47) のみ、以来十余年の経過を思うと進展に多少の不安なしとしない。この様にして、我々が原典出版の有無を調べ得る事実上最新の便宜が、依然として戦前の M. B. Emeneau: *Union List of Printed Indic Texts & Translations in American Libraries* (AOS Vol. 7, '35) である現状は何としても遺憾であり、その意味で *L'Inde classique* 第三巻の刊行を前回すでに要望したのであったが、今なおそのことを聞かない。併せて触れた *Handbuch der Orientalistik* のインド篇にも発展はない様であるが、別に Stuttgart 刊行の *Die Religionen der Menschheit* 叢書の第一部が *Die Religionen Indiens* と題し、その

第一巻として J. Gonda 教授が *Veda u. älterer Hinduismus** ('60) を執筆、文献的に詳細な資料を示される由である。果して然らば、A. Bareau その他の筆者に成る第二巻 *Buddhismus, Jainismus, jüngerer Hinduismus u. Primitive** ('61) と共に、文学史の定本の欠如をかなりに補ってくれるかと期待し得よう。

辞 書 当時知られた限りの Skt. 文献に見える、語の用例のすべてを渉獵しつくした二種のペテルスブルグ辞書——Böhtlingk=Roth: *Sanskrit-Wörterbuch* (1852-75: 略記 *PW*) 七巻と O. Böhtlingk のみの *Kürzere Fassung* (1879-89: 略記 *pw*) 五巻——は、一世紀を経た今日から見て愈々奇蹟の感を深くするばかりである。以来しかし文献の増加は止ることを知らず、新テキストに初めて見出される語、及び用例を確認される語義については (Böhtlingk 自身、この点では、*pw* によって *PW* の補足に努めたものの)、最新の研究段階に即応する *PW*, *pw* 更新の要が時と共に愈々緊急の度を加えるわけである。にも拘わらずこの要請に答えるものとしては、*pw* 第二版 ('23-'25) に続いて現われた R. Schmidt の *Nachträge* ('28) がただ一つあったのみで、それもその拠って立つ文献の幅からして既に限られた意味での補遺でしかなかった。

この点での desideratum を充足すべく、所謂 *Thesaurus Sanskrit* の企劃が具体化したのはまたインドにてであり、有力な一部西欧学者の助言と支援を得つつ、プーナの Deccan College 研究所がその実行に乗出したのである。先ず基礎作業として取上げられたのは、Böhtlingk の触れ得なかった個々の土着辞書 (kośa) 語彙を整理することであり、その成果は *Sources of Indo-Aryan Lexicography** なる叢書の形で '47 年より相次いで公けにされている。他方、各国の協力者が、夫々専攻方面のテキスト語彙について、*Thesaurus* の資料たるべきものを発表する機関誌 *Vāk* が、'51 年に発刊を見た。*Thesaurus* には約 20 巻の規模が見込まれ、'60 年までに第一巻を刊行する目標と当時耳にしていたが、結局この目標は達成されず、それ所か上記の基礎作業に属する出版さえも、紹介・書評の見られる度合 [*JA* '51 '52 '56 Renou, '53 Filliozat; *JRAS* '48 '56 Burrow; *BSOAS* '54 Brough, '55 ?] から察するに、最近に到って寧ろ鈍化している様である。事業の難航については色々と風聞もあるが、しかも Deccan College 以外に事を担い得る機関は考え難く、数年前から *Thesaurus* の直接担当に転じたという同機関の前所長、S. M. Katre 博士の令名にひたすら期待したい。(因みに *Thesaurus* は既知の Skt. 仏典すべての語彙を収める由であるが、この点について同研究所と我が国に多い専攻者との間に、協力の依頼も連絡の事実も聞かぬのは奇異であって、それだけからもこの事業の進展に疑念が持たれるのである。)

Thesaurus の急速な実現が見込薄なればこそであろうか、*pw* の写真版複製 (Graz, '59) に加えて、本年からニューヨークで *PW* の再版が出はじめた様である。規模及び内容から *pw* に平行する Monier-Williams, また基礎とするテキストの幅を限って学習用に編まれた Macdonell, Cappeller, Apte ("Student's"), Stchoupak=Nitti=Renou——これら既成の辞書すべてについても同様で、戦後に現われた版は何れも従来のもそのままの重版に外ならない。但し M. Monier-Williams: *Dictionary English and*

Sanskrit が '56 年ベナレスで再版された [IJ '59 de Jong] のは、この辞書がそもそも類書の少ない内にも質的量的に絶対のもので、校訂の必要も可能性も感じられぬに加え、1851 年以来たえて重刷を見なかっただけに、殊に讃辞が寄せられて当然であろう。

著名の辞書で改訂増補を完了したものが唯一つある。P. K. Gode と C. G. Karve 両氏を編集主任として成った V. S. Apte's Practical Sanskrit-English Dictionary, revised & enlarged ed. ('57-'59) [JOAS '60 Sternbach] がそれであって、古典期文献からの文例引用の豊富と訳語の適切とに従前とも定評のあった辞書が、大版三巻の新装で体裁・内容とも飛躍的に拡充された。増訂者の学的声望を裏切らず、*Thesaurus* に先んじて近年の発見乃至開拓にかかる相当数の重要文献を覆い、更に第三巻末の附録には主要な地名や作者名の一覧、名句金言集、殊に（パーニニ文法に基く語形の説明を略示するのが、従前ともこの辞書の特色の一つであったが、それとは別に）K. V. Abhyankar による土着文法術語の解説、などが加えられて利用価値を一段と高めている。かくてこの三巻は、Post-Vedic, Epic, Classical Skt. の関する限りでは最高の辞書との評を、*Thesaurus* の刊行を見ぬ以上かなりの期間に亘って博することであろう。ただ今回の増訂版で解消されなかった難点としては、用例の確認される語義と区別して、土着辞書の与えるのみの語義にその旨を特記していないことがある。この点、使用者側の注意が必要であろう。

辞書の形式で最も劃期的な戦後の労作は、実は上記の如き一般の辞書にはなく、'53 年以来着々と進行中の M. Mayrhofer : Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen, 昨年末ついに分冊刊行を迎えた待望の R. Turner : Comparative Dictionary of Indo-Aryan Language* 及び Emeneau=Burrow : Dravidian Etymological Dictionary, であること云うまでもない。但しこれらは、インド言語の史的研究に属するものであるから、その方面に戦後数多い他の重要な労作と併せて次回に譲ることとする。

（大地原 豊）

L. D. BARNETT

(1871—1960)

はりヴァプール出身。先ずギリシャ文学の研究者として知られたが、ケンブリッジで Cowell の教えに接し、ドイツ留学を了えた 1899 年からは、British Museum にあってインド文献の整理に生涯を捧げた。Bendall のあとを受けた *Supplementary Cat.* ('08) から、歿後に刊行された Panjabi 語文献目録に到る、六種のカタログ完成は彼の不朽の功績である。この間ロンドン University College—SO(A)S を通じて講壇に立ち、後者では設立以来の講師、一時は司書として、特にインド史の新進を育てた。博学と麗筆を兼備し、*Wisdom of the East* 叢書の数冊でインド文化の諸面を紹介、また *Antiquities of India* ('13) は周知の名著である。耆那教 *Aṅga* の二つを訳した *The Aṅgāda-dasao....* ('07), Grierson と共訳の古 Kashmiri 文献 *Lallā-Vākyāni* ('20) の外、インド学の全域を覆う百余の論考と五百に近い書評に執筆。書評の大半は *Indica* と題して *JRAS* に見られ、34 年にはこの王立アジア協会の副会長に推挙された。

ヨーロッパにおける仏教研究の現況（覚書）

このたび Jacques May 氏から寄稿を受け、本号の巻頭を飾ることとなったが、関心を寄せられる向きも多いと思われるので以下にその訳文を掲げる。訳出に当って文脈をかなり補ない、機関名・書名・人名は略記したので、適宜に原文と対照されたく、注番号については6頁以下の御参照を乞う。May氏は49年ローザンヌ大学(古典学専攻)を卒業後、51年までパリでインド学を履修、54年には論文資料蒐集のためロンドンに赴き、54—55年フランス政府給費生として再びパリで古典・仏教中国語を学んだ。56年以降ローザンヌ大学司書、59年には *Prasannapadā*, 仏訳を刊行、59—60年ロンドンを再訪して日本語を習い、60年上記の著作に対しローザンヌ大学から文学博士号を受けた。本年スイス国立学術財団研究員の資格で来日、5月から本学大学院研修員として仏教学教室に所属する。

編集委員から光栄にも寄稿を依頼され、感謝にたえないが、省りみればその責を果し得そうにも思われない。以下の覚え書きも、完全に網羅的であるとは云い難いであろう。なぜなら筆者自身、自らの研究分野からかなり離れた司書関係の職務に忙殺され、この両三年の間、ヨーロッパの仏教学者たちと、やや交渉を欠くようになったからである。

スカンデナヴィアからは、近頃あまり消息がない。

スエーデン：——パリ語土着文典 *Saddaniti* の刊行は、二十五年来、この仕事に当って来られた編者 H. Smith 教授の逝去（'56）後も、ひきつづき行われている。¹⁾ Smith 教授の門下生 N. Simonsson 氏は、ウプサラ大学に重要な学位論文を提出した。同氏はこの論文で、法華經および金光明經の諸伝本を分析して、チベット訳経者の訳出方法を検討している。²⁾ この論文は、連続する研究の第一篇にすぎず、著者は続篇の発表を約束している。

デンマーク：——コペンハーゲンでは、E. Haark 氏が、チベット藏経成立史に関する年来の研究を推進している。この研究は、すでに、54年ケンブリッジで開かれた国東東洋学会議で、その一部が発表された。この複雑な問題に関して、同氏はおそらく、ヨーロッパ第一の権威者であろう。*Critical Pali Dictionary* の刊行は、48年以来中絶していたが、60年から再開された。³⁾

イギリスにはチベット学の逸材 D. Snellgrove 氏がいて、現在ロンドン大学「東・阿研究学院」(SOAS) の講師である。Snellgrove 氏はチベット語の専門家で、優れたサンスクリット学者でもあり、卓抜・迅速かつ堅実な仕事をする人だが、*Hevajratantra* のみごとな校本を世に問うた。⁴⁾ ネパール高地峡谷は、周知のように、宗教的にも言語的にもチベットの延長であるが、同氏はここを踏査して、同地域における仏教の現況に関し新しい参考資料を集めている。⁵⁾ ⁶⁾

J. Brough 氏は、ロンドン大学のサンスクリット教授、SOAS インド・パキスタン・セイロン学科主任であるが、最近、豊富な注釈をつけて、サンスクリット本『法句經』の校本を刊行された。⁷⁾

E. Conze 氏は、英仏海峡沿いの Dorset に引籠り、諸般若經典の研究を、困難な条件のもとで続けておられるが、しかもなお近年、専門家向けの三著作を公けにされた。著書 *Prajñāpāramitā Literature* は、般若文献成立の年代と発展の歴史に関する氏の三十年に及ぶ研究を集約したものである。⁸⁾ 他の二著作は訳業である。著者は訳出にあたり、躊躇なく原文を故意に削除しているが、これは当該原文が、幾度となく反覆され、しかも同氏が誰よりもよく通曉しておられる方面の文献だからである。『八千頌般若』の翻譯は、簡潔でしかも詩的であり、学術的価値の外に、疑問の余地なき文学的価値をも見せ、特に卷末の常啼菩薩求法行の挿話などがそうである。⁹⁾ もう一つの訳書は、*Large Sūtra* という表題にしてはかなり奇妙な構想であって、主としては二千五百頌般若に基づきつつ、しかもまた十万頌般若と一万八千頌般若にも拠っている。これらの三本は非常に同質的なものであるから、このような混成もおそらく差し支えないのであろうが。¹⁰⁾

R. Robinson 氏は、トロント(カナダ)の出身で、SOAS インド哲学助教授 D. Friedman 氏の指導を受け、ロンドン大学に注目すべき学位論文を提出した。これは、中国中観派の代表的哲学者、僧肇の思想を主題としている。学位審査の際はタイプ刷りの形だったが、現在印刷中で、近日公刊の予定である。¹¹⁾ なお、これに先立つ論文の一つが、ハワイ大学の雑誌 *Philosophy East and West* に発表された。¹²⁾ Robinson 氏は、僧肇および Nāgārjuna (竜樹)の論理を精細に研究し、記号論理学を駆使する一方、また補遺として、数多くの文献を訳出している。同氏は現在、米国ウィスコンシン大学の教職にある。

Pali Text Society は、律藏、經藏の校本・訳本をたえず再版しているが、これに反し論藏の方は、停頓のままである。同協会はその外に、*Concordance to the Pali Canon* を刊行中で、52 年から 57 年まで最初の十分冊が順調に出たが、以後しばらく中断の様子である。¹³⁾

既にお判りのように、英国における仏教研究の中心はロンドンにあってオックスフォードやケンブリッジにあるのではない。ケンブリッジの Shackleton Bailey 教授は、仏教文献学から次第に遠ざかり、それだけラテン文学の方に打ち込んでおられる。Conze 氏だけが、ロンドンから少し離れて、地方で仏教研究に従事している訳だが、同氏も去年までは首都に住んでおられたのである。

SOAS 図書館は、仏教学、さらに東洋学全般について、ヨーロッパ随一である。蔵書が同学院の建物のあちこちに散在しているきらいがあるとはいえ、それははかえって蔵書量の豊富さを物語り、パリの図書館が都の四隅に点在している不便とは比較にならない。万一同学院の図書で間に合わぬような場合には、India Office や British Museum の附属図書館で補うことができる。余談として申し添えれば、British Museum には東洋学関係者のために実に快適な閲覧室がある。最後に、SOAS 図書館では、図書の自宅借り

出しが無制限に許可されている。

オランダには同国東洋学の伝統が維持されていて、仏教研究の比重は今日でも高い。飛躍的發展をたどる *IJ* 誌には、すでにこの方面の論文が数多く寄稿されている。また同誌の編集主幹、ライデン大学の de Jong 氏は最近チベット仏教の聖者ミラレーパの伝記を出版した。¹⁴⁾ E. Zürcher 氏は、中国における仏教の発展について、学位論文をユトレヒト大学に提出した。この大作は英語で書かれ、二巻にまとめて刊行されたが、中国仏教史研究に一時期を画するものであろう。¹⁵⁾

西ドイツでは、大戦の動乱が終って學術機関の再編成が見られた。マールブルク大学は、ベルリンの諸図書館の疎開図書を引き継ぎ、それを中核として「西独図書館」の設立となったわけであるが、そこにはいくらか重要な東洋学関係資料が収められている。同じくマールブルクで、J. Nobel 教授が、『金光明經』関係のかねてからの研究を進めておられる。ゲッティンゲンでは、E. Waldschmidt 教授が、中央アジア出土のサンスクリット原典の出版を続行される。ハンブルクでは、L. Alsdorf 教授を中心に、一学派が形成されつつあり、ボンでも P. Hacker 教授をめぐって同様の状況である。筆者がローザンヌ大学司書であった時、ボン大学の学位論文二篇の写しが回付されるのを見たが、残念ながら著者名・題名などを今正確に挙げかねる。一つはパーリ仏典における *saṃkhāra* の語の意義を論じたもので、他は 1700 年頃北京に来たチベットの高僧、章嘉第一世ガクワン・ロブサン・チョェデンの生涯を述べたものであった。

オーストリアでは、E. Frauwallner 教授が、ほとんど単独でウィーンに活躍する。『インド哲学史』¹⁶⁾ の著を進めるとともに、教授御自身が創刊された *WZKS* 誌¹⁷⁾ を、ほとんど一人で推進され、教授年来の Dignāga (陳那) 研究を総合する卓抜な論考も同誌に掲載された。¹⁸⁾ Frauwallner 教授の著作については、本誌前号に服部氏が委細を尽くし論評されたところである。

イタリア：——G. Tucci 教授が設立された「中・遠東研究所」(IsMEO) は、チベット学に関し現在ヨーロッパで最も重要な研究機関である。ここからは叢書 *Serie Orientale Roma* が刊行され、同叢書には、特に Conze 氏と Tucci 教授自身による仏教原典の校本・翻譯が収められている。^{19) 20) 21)}

フランスでは、P. Demiéville 教授が今や東洋学者間の長老であり、人格的にも学問的にも、教授の権威は衆目の認めるところとなっている。教授が関心を寄せておられるのは何よりも中国の禪であるが、ちなみに教授が *L'Inde classique* に執筆された珠玉の名篇、中国仏教総説をここで特記したい。これはまさに教授畢生の研鑽の結実である。

Bibliographie bouddhique の編集を、事実上ひとりで果しておられるのが Marcelle Lalou 女史である。Demiéville 教授が珍らしくもただ一度、教授平素の控え目な措辞を一擲して、「敏腕の危鑑、無比の厳密、献身と強靱の奇蹟なる Lalou 女史」という言葉を先般 *JA* 誌上で女史に向けられたが、我々はこの献辞に無限の共感を覚えずにはいられない

(上の引用は筆者の記憶による)。実際、ヨーロッパ仏教学者の研究はすべて *Bibliographie bouddhique* の恩恵にあずかっていると云ってよく、ことに同誌は、山口・長尾両教授の御協力のおかげで、我々にとり日本の出版物を知る最上の手だてとなっている。

L'Inde classique の中で、インド仏教に関する章を鮮かにまとめられたコレージュ・ド・フランス教授 J. Filliozat 氏は、ボンデシェリーの「フランス印度学研究所」を創設し、また「フランス遠東学院」(EFEO) の所長に再任されて以来、学術行政の劇務に忙殺され、他方また仏教研究からは遠ざかって、むしろタミール文化と南印の諸宗教の方面に向われるようである。とはいえ、前記ボンデシェリー研究所の図書には仏教関係のものもちろん収められているし、さらにセイロンに近いことを思えば、同研究所はセイロン仏教の研究にも一つの基地となり得ようか。事実、Filliozat, Demiéville 両教授の門下で現在パリの「高等学術研修学院」教官である A. Bareau 氏は、ボンデシェリーから発ってセイロンに赴き、同国仏教の組織を現地で調査したが、調査結果は『フランス印度学研究所叢書』に発表されたのである。²²⁾ Bareau 氏はさらに、中国資料による原始仏教の研究を、従前どおり継続している。

Demiéville 門下の J. Gernet 氏は、現在ソルボンヌ教授であるが、学位論文の一つを出版した。この書は、発見・参照・解釈ともに極めて困難な種類の一次資料に対する同氏の稀に見る造詣の深さを物語っている。²³⁾ ただ仏教学にとって遺憾なことには、Gernet 氏は次第に中国社会の純経済学的研究に移りつつある。

名前ははなはだアングロサクソンのであるが、L. Silburn 女史もまた、パリ学派の一員であって、L. Renou, P. Mus 両氏の門下、現在「高等学術研修学院」の教官である。女史の学位論文は、すでに 48 年、審査を通過したのであるが、それがようやく 55 年になって上梓された。²⁴⁾ この著作には、ブラーフマナ文献と原始仏教並びに後期仏教 (Dig-nāga とその一派) 思想との関連について、鋭い洞察が込められており、Mus 氏の——さらに同氏を介して S. Lévi の——薫陶が看取される。実に密度の高い労作で、本稿の筆者はスイスの学術誌 *Etudes asiatiques* に、この書について多少とも詳細にわたる紹介の稿を草したが、近く掲載されるはずである。

フランス文化圏の諸国は、パリ学派に参劃寄与するところが多いが、特に大乘仏教の研究の場合がそうである。

ベルギーには、ルーヴェン大学教授、教会参事会員 E. Lamotte 師があり、Poussin がガンに創始した偉大な学統を継いでおられる。出版進行中の教授の記念碑的の大作——『大智度論』訳²⁵⁾ と『インド仏教史』²⁶⁾——に加えて Lamotte 師は現在、同師が「最も美しい大乘経典」と見なされる『維摩経』を訳出中で、この秋に出版の予定、あるいはチベット本の校本が添えられるかも知れない。Lamotte 師はまた華嚴経方面にも関心を寄せられている。教授の若い門下生の一人 H. Durt 氏が現在京都におられるが、以上の情報は同君に負うもので、ここにあわせて御礼申し上げたい。Durt 氏は原始仏教を専攻、先般の東方学会主催、国際東方学会議で研究発表をされた。²⁷⁾

スイスでは、C. Regamey 氏の存在のおかげで、新しい局面ができてつある。同氏の家系は本来スイスの出であるが、一世紀以上前にロシアに移住し、その後ロシア革命でポーランドに移った。——というわけで Regamey 氏はポーランド育ちである。J. Przy-luski と S. Schayer の教えを受け、次いでワルシャワ大学教授に任ぜられたが、氏の経歴は戦争によって中断された。ついにはロシアの進駐に直面してポーランドを去らざるを得ず、故国スイスに難を避けられたのであるが、故国とはいえ所詮、氏にとって流離の地に外ならなかった。当時スイスでは、東洋学研究が全般的に、極度に恵まれぬ状況にあったのである。伝統の欠如、貧困な図書館（『翻訳名義大集』や『大正大藏經』など探してもあろう筈はない）、不十分な資金——というのも、大学を含めて公共教育がスイス連邦政府の所管ではなく、学術研究を支えるには財政規模の余りに貧弱な小主権単位 canton（州）に属するからである。しかしながら Regamey 教授を中心に、次第に一つの学派が形作られてきている。教授門下の一人 P. Horsch 氏は、むしろ純インド学畠の人であるが、現在チューリッヒ大学の講師になっている。この大学には数年前から中国語の講座が置かれていて、その先例があるだけに、インド学講座の創設も楽に運びそうな見込みである。Regamey 氏のもう一人の門下生、V. Python 神父は、大宝積經の重要な一節、『優波離會第二十四』の対訳校本を近く出すことになっている。同じく Regamey 門下の一人として、本稿の筆者は *Prasannapadā* の数章を訳出した。²³⁾ Regamey 教授自身、Lalou 女史と協力して、*Kāraṇḍavyūha*（莊嚴寶王經）のクリティカル・エディションを準備中である。

近年になって、パリの「国立学術研究中央機関」（CNRS）に倣い、「スイス国立学術研究財団」という機関が設立された。スイスの大学の現行機構が全く時代後れであるという認識が、特に医・理学部方面で一般となってきた、機構改革が不可欠とされるのであるが、思いがけなくも東洋学が、あるいはその恩恵にあずかりそうな様子である。というのも筆者自身の場合がそれで、すでに「国立財団」給費生の一人が初めて東洋に派遣され、彼の研究者としての素養に仕上げをかけることとなったのである。

スイス来住後数年して、Regamey 教授は、ポーランドの東洋学会と接触を再開することができた。その機縁となったのは、ポーランド東洋学の機関誌 *Rocznik Orientalistyczny* の一卷を、S. Shayer 追悼号として特集する計画であった。Shayer の高弟である Regamey 教授が勿論これに参劃されぬ筈はなく、同誌第二十一巻の前記特集号に教授の論考が見られよう。

東欧諸国は文化活動に大いに力をそそぎ、東洋学もその例にもれない。しかしこの場合の力点は、宗教・哲学の研究よりも、むしろ言語学・考古学に置かれている。特にソ連邦の場合がそうであって、Demiéville 教授は、昨年モスクワで開かれた国際東洋学会議に参加の機に中央アジアを訪れたが、同地域で行われているいくつかの重要な発掘を目のあたりにされたとのことである。

（編集委員 沢）

会 員 消 息 ○昨年まで人文研所長を二期おつとめの塚本善隆教授は、本年2月8日に定年御退官となったが、以来市教育委員、更に5月からは国立京都博物館長の要職に御活躍である。○35年度予餞会、2月25日、霞会館。荒牧典俊君(仏教)の修士課程終了、山下隆夫・朝倉義寛(印哲)・上岡弘二(梵文)三君の学部卒業を祝う。羽溪・山口先生の長老から、錦織寺の木辺氏など久々の御来会があり、近來の盛会であった。○服部正明・梶山雄一の両氏が、3月1日付で夫々印哲・仏教講座の助教授に就任。○36年度に部外から御來講を仰ぐ教官は、印哲に佐保田鶴治(阪大)、仏教に野上俊静(谷大)・藤吉慈海(人文研)、梵文に加賀谷寛・内田紀彦(大外大)の各位である。○関係教官懇親会、5月30日、細川別邸。足利教授の御配慮により、部内・部外の新任教官歓迎を兼ねて開催。○新入生歓迎会、4月21日、楽友会館。大学院博士課程(仏教1)、同修士課程5(梵文1・印哲2・仏教2)、学部3(印哲2・仏教1)聴講生2。仏教修士入学の河村君はカナダ国籍。○Hubert Durt(ベルギー)・Jacques May(スイス)両氏が相次いで来学、5月より大学院研修生として長尾雅人教授のもとに仏教学を研究。〔49, 52頁参照〕○インド Visvabharati 大学講師 Venkata Ramanan 氏が谷大の招聘により在洛の機を利して、5月下旬より二カ月間 *Prasannapadā* 講読をお願いし、教官学生多数が参加した。○例会、6月10日、楽友会館。朝倉・上岡の両君が夫々『*Naiṣkarmyasiddhi* の Vedānta 思想』・『*R̥gveda*における Yama』と題し報告。○長尾教授を代表者とする総合研究『インド哲学史上における唯識思想の位置』に対し、7月下旬に本年度文部省科学研究費交付の通知があった。○京大西南アジア研究会では、このたび伊藤義教先生が編集主幹となられ、32年創刊の機関誌『西南アジア研究』に飛躍の発展を見た。8月初めB5活版の新装で出た65頁の第6号には、伊藤先生の二論考と上岡君の(前掲表題)論文が含まれている。なお同誌は半年刊、印刷は本誌と同様あぼろん社。○梶山助教授は英国文化振興会の留学生として渡英。7月28日に神戸を発ち、既に次記に安着された— c/o Mrs. Oulagi, 179 Fordwych Road, London N. W. 2。ロンドン大学 SOAS で一年間研究の予定。○工藤成樹(仏教・博士課程修了)・海恵宏樹(同在学中)の両君は、ラングーンに新設の International Institute for Advanced Buddhistic Studies に留学決定、9月29日羽田を発つ。○善波周先生は6月中旬胆嚢壊疽で重態に陥られたが、手術後の経過きわめて好く休養中に御全快、既に授業もお始めである。○松尾義海教授は今春より御健康すぐれず、7月以来加茂川病院にて療養に専念される。近く外科手術に御決定の由であるが、余後順調に御全治へ向われることを祈ってやまない。

編 集 後 記 はやりの物価倍増は創刊早々の本誌にピンチでしたが、この第2号と共に八カ月毎の発行に見通しがつきました。月々の積立てに御協力の会員各位、特別に寄付をよせられた沢山元昭氏、寄稿を快諾された J. May氏、前回に続きお骨折頂いた伊藤武夫氏に、夫々深く感謝します。会員消息欄を設けましたので、御変動あれば編集部までお知らせ下さい。本年度編集委員は4月例会で決り、教官側から大地原・服部・梶山の三助教授、学生側から小林と学会幹事の山下君、計5名であります。(小林信彦)